

新しらい佛敎雜誌

浄土

七・八月號



法然上人鑽仰會發行

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十三年七月廿日印刷 昭和二十三年八月一日發行

第十四卷

第五號

法爾自然の道理

法爾の道理と云ふことあり。炎は空にのぼり、水はくだりさまに流る。菓子の中にすきものあり、甘きものあり。これみな法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は名號をもて罪惡の衆生を導かんと誓ひたまひたれば、唯だ一向に念佛だに申せば佛の來迎は法爾の道理にて疑ひなし。

——法然上人——

目次

罪	………	(二)
かたよらぬ心	………	(三)
——中道——		
眞野正順		
現代と法然上人	………	(六)
東 慈道		
佛教に關する斷想	………	(九)
永見七郎		
信仰相談	………	(二)
中村辨康		
筆 兎と子供	………	(一四)
瀧澤春男		
編集後記	………	(一六)

かたよらぬ心

— 中道 —

眞野正順

一體、人の心といふものは、まことに、偏り易いものでありまして、この度、敗戦の惨禍を引起しました原因につきましても、いろいろと數へられておりますが、ただ今となつて私共の胸に強く思ひ當るところは、私共が國家についてあまりに偏つた考へ方をしてゐたといふ事であります。ところが、さて、敗戦の今日となつて、個人の自由が新しく解放されて見ますと、今度は反對に、社會も何も忘れ果てて、ただこの自己一身の利益の爲にのみ夢中になつて狂奔するといふ人達が、あちこち、非常に目に立つて参りました。

この様に、人の心は誠に偏り易いものでありますが、この偏りは、必ずしも、その人が愚かだから、といふ譯に限りません。賢い人も偏つた考へ方をします。『愚かな人は愚かなまま、聰明な人は聰明なままで片よる。』世間にはそう云ふ事が屢々あります。そして困つた事にはそ

の本人にはこの偏りが一向氣がつかないと云ふ事です。自分では確かに正しいと思ひ込みながら、實は非常に偏つた考へ方をしてゐる。そして、知らず知らず更に大きな謬の中に陥ち込んでゆく。

佛教でも、この眼に見へぬ心の偏りに、特に注意致すのでありまして、「中道」を取らねばならぬと切りに申します。つまり、極端に陥らぬやう、中の正しい道を歩めといふ事であります。

それならば、どうしたならば、我々はその偏らぬ中道を行く事が出来るか。一寸考へて見ますと、別段難しい事でもない。中道でありますから、兩方の極端に近よらぬやうにして、その中間の道を行けば好からう。——そう云ふ風に考へられます。

これは一應尤もな考のやうであります。然し實はこれでは本當の中道は得られないのであります。例へて申しますと、ここに一人の潔白な人が居たとしましやう。所が、そこに何か企らむ者があつて、この人に就て、あ

らぬ無根の悪い噂を作つてあちこち言ひふらしたとします。その時、この噂を聞いた人達は『あの人は平常潔白な人のやうに思つてゐたが、こんな噂が出るところを見ると、火の無いところに煙は無い、と云ふから、少しは何か有つたのだろう。噂ほどではないにしても、眞理は中間に在ると云ふから、少しは後ろ暗い處があつたに相違ない』などとし少し疑をかけてくる。ところが、これでは、企らむ者の術策に陥つたと同様でありまして、初めから潔白な本人にとつては、此上もない迷惑千萬な事があります。つまり中間をとるから純白なものが鼠色に見えてくる。ところが世間には、かう云ふ事が屢々あるのでありまして、ただ中間を中間をとねらつて行く内に、いつか不正な聲に引きずられて間違つた判断をしてしまふ。かう云ふ中間の態度といふものは、いつも決斷のない、曖昧な態度になり勝でありまして、賛成するやうでもあり、反對するやうでもあり、いつも中途半端な煮え切れない態度で、愚圖々々してゐる内に、結局、強い者に引きづられて行く。本當の眞理は必ずしも常に中間にばかりあるのではない。一見、かへつて、傾いて見へる態度の中に、眞理が存してゐる事が屢々あります。『傾きながら正しい』社會の歴史はしばしばこの事を實證するのです。

それならば、眞の一かたよらぬ道はどこに存するのであるか。眞の一かたよらぬ心とは、兩極端を捨ててその中間を求めてゆく事でなく、そうでなくて、却て兩極端に向つて突き進みそれをよく理解してゆく事なのであります。

即ち一つの事件を前にした時、まづ、それが主張され

る理由をよく調べると共に、必らずその反對の立場に振向いて、更にその主張によく耳を傾けるといふ事であります。そして、この兩極端の立場に充分な理解が出来た後に、自からわき上つてくるところの判斷、それが、眞の一かたよらぬ道一なのであります。

かたよらぬ博い理解、これが先づ大切であります。世の中は決して單純に出来ておりません。種々さまざまな原因が、目に見へぬ糸の様に縫れ合つてゐる。それ故、佛陀は、世の中の事をただ一つの原因で決めて行く事を強く戒められました。様々の多くのものによつて世の中は成つてゐる。それが縫れ合ひ、搦み合ひ、多くの年月をかけながら徐ろに實を結んでくる。これを「緣起」と名づけます。此姿をはつきりと正しく把むことが必要であります。緣起を知る者がよく中道を知るのであります。然し、この事は容易いやうに見えて、實は決して簡單ではありません。佛教ではこの爲には、二つの心の用意が必要だとされております。

その一つは、己れを空ろする事であります。眞實の姿を映しとる爲には、きれいに拭ひとられた鏡のやうな心を用意せねばなりません。

人は誰れでも、生れて今日迄に、知らず知らず色々な片よつた見方や傾向を身につけて終つておりまして、それが、善きにつけ、惡しきにつけ、私共を牽制して物事を公平に見ることを障げております。英國の哲學者ペーコンは、人の考へ方には、不知々々陥る穴がある。その穴の中から、物事を眺めるから、つい偏頗な見方をしてしまふのだと云つて、それを四つばかり數へておりますが、どうも、かう云ふ傾向は誰れにでも免れ難い様であ

ります。自分では確かに公平に見てゐるつもりでゐながら、實は、氣の付かぬ内心のもの——自分の立場だとか利益だとかに引きずられてゐる。

かう言ふものを切り捨ててゐるために、まづ斷乎として己れを空うする事が必要であります。己れを空うした清い心の上に、物事のゆがみのない姿を寫し取つた時、眞理はおもむろに其影を映してくるのであります。眞の中道は「空」によつて現はれる、と云ふのはこの譯であります。もう一つの心の用意は「愛」であります。愛情であります。

——公平な博い理解は、まことに大切なものであります。如何に公平でありましても、單なる理性の理解だけでは、深く物事の奥底に達する事が出来ない憾があります。理性の理解はいかに整つてゐても、人生のふかい所に達しません。本當に物事の眞相に達する爲には、その内側から事實を掴んでゆくもう一つの眼が必要であります。即ち、暖い一愛情の眼が必要であります。物事は、すべてその内側から見ねばその眞相をとらへる事は出来ません。それが善きにせよ、惡しきにせよ、その眞相を理解するためには親しくその人の立場になつて、共に感じ、共に悩む、あたたかい同情の理解が無ければその核心を捕へる事は出来ません。かかる深い理解を齎すものそれは愛であります。

この様に、一方には博い理解と、一方には深い愛情。冷たい頭腦と温かい心臓。この二つが眞實の理解のために互ひに缺く事のできない二つの條件であります。曇らざる理知は、博くかつ整つております。しかしながら、ことの深きに達する事ができません。理知はその

博きが故に自己を外面的にします。常に整つてゐる故に自己を形式的にします。ものの深きに達するためには、どうしても温い愛の理解をそれに添えねばなりません。

温い愛の理解は深い。事物の奥底に達します。しかしながら、深いだけにまた狭い。狭きが故にしばしば偏りしばしば迷ひます。また博い曇らざる理知がそれを助けるのでなければ眞の理解には達し得ません。

それ故、佛教では常にその道を行く者に、曇らざる理性と共に深い愛の心を用意せよと教へております。智慧と慈悲、この二つが佛の道を行く二つの車輪に喩へられております。

最後に——それならば、どうしたならば、私共はこの二つを兼ねて身に附けてゆく事が出来るのでありましようか。ここに至つて、遂に問題は「信仰」の世界に入つて参ります。これはただ、習ふて直ちに習ひ得べき事ではありません。努めてただちに之を得べき事でもありません。私共の心が、自からこの様にその内面から開けて來ねばなりません。

それは丁度、心優しい人が、おのずから巧まずして深い行届いた理解をするやうに、ただ天地自然の大生命を己れの生命とする廣い豊かな心の持主にしてはじめて達し得るところのものです。即ち、この天地大生命の生命にかよふ信仰の心に依てこそ、はじめて、眞に己れを空うして、この天地に満てる事々物々についての深い理解が遂げ得られるのであります。

まことに偏らざる中道のみちは、ただ博い信仰の心から、はじめて現はれて來ると教へられてゐるのであります。(二二一、二二二、七NHK放送要旨)

現代と法然上人

東 慈 道

現代は神を見失える時代である。しかし、これは現代にかぎつた現象ではなく、文藝復興^{ルネサンス}にはじまつた近代の歴史は、神からはなれゆく歴史であつた。

文藝復興は近代の黎明と言われるが、それは、すべてを神の下に隷屬せしめられ、生きることすら神のみむねのまゝによらねばならなかつた中世時代に反抗して、人間性の解放をめざした人本運動であつたギリシャ文化はそれ故に、人間性を極限に發展せしめた理想的形態として追求せられ、その復興にあらゆる熱情をさゝげつくしたのである。神の隷屬から人間の權威を奪還し確立しようとした文藝復興が、近代の黎明といわれるところに、今日の神性喪失の宿命がきざしてゐる。しかし、それはまた、人間意識向上の當然の一過程というほかに一部によつてわい曲された文化を、正しく引きもとそうとする人間本來の欲求が、つよく働いていたことを見のがしてはならない。

文化は人間のあらゆる能力が調和される時に、完全な華を咲かせるものであるが、時にその比重が異なり、一つが他にくらべて大きくなつたり、或は支配せんとする野望をたくましくしたりする。そして、それが極端になり調和が完全に亂されると、再び調和をとりもとそうと

する復元運動が行われる。ヒューマニズム運動がすなわちそれである。文化の混亂時代には、なによりも先きに、ヒューマニテが希求せられ、ヒューマニズム運動が唱導されるのは、かゝる人間本來の欲求によるものである。

さて文藝復興は神に對する抗辯であり、神の一方的支配から人間性を解放しようとする復元運動であつたが、一たび目覺めた人間性は、神からはなれて益々ふかくその權威の確立にむかつて進んでいつた。神中心の中世はこゝに終りをづけ、人間中心の近代がひらけはじめたのである。

2

近代哲學の道をひらいたデカルトが、「我疑うが故に我在り」から哲學しはじめ、我の存在こそ疑うべからざる明證として定立したことは、近代の自我確立に大きな貢獻をあたえた。爾來、哲學は觀念論であれ經驗論であれ、もつばら人間の思惟人間の經驗が研究の對象となり、自我の追求に一切の努力がそゝがれた。もちろん、神が全然否定されたのではない。スピノザのごとく神の追求に全生涯をかけた者もある。しかし、それは汎神論と言われるごとく人間の思惟から思量された神であり、中世紀の一切を支配する神ではなかつた。カントにい

たつては、神は人間の認識のおよばざるものとして、一應純粹理性の
らち外におかれた。近代神學の基礎づけを行つたシュライエルマツヘ
ルすら、人間の思惟を中心にして神を追求している。そして、ヘーゲ
ルの哲學を轉倒したフオイエルバツハは、神は人間の作つたものでは
ないと、コペルニカスの轉廻をこゝろみ、以後のマルクスの宗教否定の
溫床を提供するにいたつた。かくして自我の確立を目ざした近代は、
自我を追求するあまり、いよいよ神よりはなれゆき、十九世紀の科學
時代とも互に助けあい、ついに宗教否定の理論にたどりついた。

しかし、自我はたして確立されたであらうか。近代人の特徴は自
己不信にあると言われる。意識過剰になやみ、自己を喪失し、たえず
不安の淵にのぞむ人間、それが典型的な近代人である。精妙な心理描
寫をこゝろみ、近代心理小説の基礎をひらいたスタンダーは「赤と
黒」でジュリアン・ソレルという野心にもえた特異な人間をえがきな
がら、意識過剰に自ら命をたつたが、それは救いをあくまで拒否し
ん細に人間を分析しゆく近代人の象徴ではあるまいか。たしかに近代
人は、自我を確立するに急なあまり、救いを忘却した。そして内省が
深まれば深まるほど、自我は複雑になり、その確立は困難さを加え
た。これは自己のみを對象として自我を確立しようとした近代思考法
の當然の歸結で、自己不信におちいるのは、あたりまえであつた。

3

以上簡単に素描した近代人の自我確立の方式は現代の日本人にも尾
をひいている。もちろん、現實には社會から隔絶した人間はなく、我
々は社會的人間であるから、社會との關係に重點をおいて自我を確立
しようとする試みを強く、その面から自己不信をたゞき破ろうとして

いる人々もある。しかし、つちかわれた自己不信は根強い。殊に敗戦
のいたでは深い。絶對、永遠というものはすべてこわれ去り、不信は
極度に街にはらんしている。戦後、文學の領域から主體性論議が起
り、ついには思想界を風靡するにいたつたのは、自己不信にたえられ
なくなつた戦後世代の痛切な叫びに由來している。主體性を確立する
ことなくしては、彼等は生きることができないのである。しかも從來
の近代的思考によつても、また他の分野では明白に解決點をのぞかせ
てくれるマルクシズムによつても、この希求は満たされないものであ
る。かくしてキリスト教が新らしい姿をもつて、彼等の眼前にあらわ
れ、神が再び脚光をあびはじめている。はたしてキリスト教の神によ
つて、この悩みが解決されるであらうか。キリスト教の神が、近代的
人間の思考にたええないことは、文藝復興以來の試練によつて明らか
である。私はこゝに佛教殊に淨土教が新らしく再検討されるべき時に來
ていると考える者であるが、佛教が一向にかえりみられないのは、ど
うしたことであらうか。

佛教は、結局、佛性開發を目的とする教であるが、佛性は我の否
定によつて開發された。釋尊の出家は深い内省の結果であり、成道へ
の道もまた自己追求の血みどろな歩みであつた。追求すれば追求する
ほど自己がとらえにくくなることは、釋尊といえども例外ではなかつ
た。そして最後にたどりついた悟りの境地は、自己を追求することが
誤りであつたということであつた。我にとらわれることが、一切の苦
しみの根源であるということであつた。自我から脱する、即ち我を否
定するところに、苦しみからの解脱があつた。佛教にはいろいろの教
えがあり、教義相容れないとも見える宗派の對立もあるが、此我の否

定は、各宗派に通じた原理である。

法然上人の教えもまた我の否定による大我への歸入である。上人の求道生活は佛教知識の獲得からはじまった。自己の救いをもとめて、當代の名僧知識に教えを乞い、彼等に満足できなくなると、自己の力で解決しようと、萬卷の經論を涉獵した。自己の力で道をもとめようとする聖道門の時代であつてみれば、これはまた當然の求道生活であつたろう。しかし解脱の境地は我を破ることによつて開かれるものであるのに、自己の力を信じ、自己の知識にたよらんとする當代の學匠たちに、なんで心の安らぎがもたらされよう。上人が何れの人にも満足されなかつたのは當然である。

しかし上人もまた時代の子である。彼等によつて得られなかつた解脱の境地を、自己の力で經論から得ようとした。一切經は六度び讀みかえされた。自己内省はますますするどくなつた。が經論が數多くよまれ、自己省察が深まれば深まるほど、それに比例して悩みはひろがり、苦しみは深刻になつてゆく。その苦惱が頂點に達した時、唐の善導大師の觀經疏が手にふれた。すでにこの書物は以前にも目にふれたものであるが、苦惱が極限にきていたので、新しいものとして上人の眼に映じた。靈感は流れた。自己の力で解決しようとした求道生活は、この時終止符をうつた。自己の限界がはつきり分つたのである。人間の知識では自己を救うことは出来なかつた。自己が否定され、我が破りさられた。すると、そこに大きな我が現れた。小我をつゝむ大きな我であり、悩みを溫くいだきとる大らかな愛であつた。自己否定はかくして自己肯定となり、しかもそれは大きな我につゝまれたゆる

ぎなき自己の確立だつた。

4

法然上人の念佛生活こそ、眞實の自己確立の道ではなかつたか。不安におゝのき、自己を喪失せる人々は、あらためて法然上人を再検討すべきではなからうか。もちろん、時代の差異、社會的條件の相違により、上人の教えをそのまま現代に強要することは無理である。たとえば現代は個人的生活よりも社會的生活が重視され、來世的願望より現世的欲求がつよい。また觀念的形態が社會的條件によつて規定されることも、一應は認めねばならない。従つて法然上人の教えに深い人間自覺の眞理が存在するとしても、かゝる現代の傾向を無視することは、かえつて上人の教えを殺す結果をまねく。法然上人を現代に生かす方法は、個人の救済と社會の救済との關係をよく深く掘りさげ、そしてそれを社會生活の中にいかに綜合調和せしむべきかの淨土教徒の殉教者的思索にあると思うが、これはまたひろく現代の不安を除去する道である。

現代人の不安は、すでに述べたように自覺した自我が確立されないとところに胚胎している。なに故に確立されないか。いろいろの問題はあるであらうが、文藝復興以來擴大されてきた人間理性の獨裁に災されてゐる點は見のがせない。自己追求が結局自己意識過剰におちいり自己不信を招いたのも、科學萬能主義を信じてヒューマニテを見失つたのもつまるところ、理性を過度に擴大しすぎた結果ではないか。文藝復興が神學からの解放を目ざしてヒューマニテ運動を唱導したのとは反對に、現代は宗教の例からの抗辯の中に、ヒューマニテ獲得の源泉がある。すなはち、人間の限界を知ることによつて、自己を積極的に確立した法然上人の教えの中にこそ、現代にふさわしいヒューマニテ運動の萌芽があるのではないか。

かゝる意味において、上人を現代的視野の中に再検討することは、最も緊急な課題であることを信じて疑わない。

佛教に關する斷想

永 見 七 郎

— 佛 教 に 關 す る 斷 想 —

「歸敬文」を讀んで

ぼくは佛に縁のない度しがたい異教徒とみえて、最近まで歸敬文というものを知らなかつた。ところがそれを最近讀んで驚ろいた。こんなえらい文章はちよつと例がない。全く文句なしに感心してしまつた。何とも思ふともいふような大感激をうけた。佛教の方では有名なものらしいから、知つてゐる人が多いと思ふが、ぼく流にその感心したところを書いてみる。

まづ「人身受け難し、今すでに受く」という言葉が冒頭にある。これは佛教の考え方で人間にはなかなか生れられるものではない、前世の因縁でチク生に生れても仕方がないものが、何の幸かりつばな人間に生れて來た、これは大へんな幸福なことだというような意味である。ぼくは前世を信じない人間だが人間に生れたことはよかつたという意味はわかる。人生には淋しいことや苦しいことも多いがそれにまけない美しいことがある。楽しいことはそんなにないかも知れないが美しいことはたくさんある。たとえばお互に愛したり愛されたりすることなどがその一つだ。ぼくの短い經驗でも物質的生活はボロボロでも美しいことは澤山ある。だからぼくは人身受け難しといわれても大いにわかるように思う。

第二に「佛法聞き難し、今己に聞く」というのがある。これは全く同感で、現にぼくなどは四十八になるまで、本當の佛法は聞いたことがなかつたのだ。碧巖錄などが好きでときどき拾い讀みはしたりしたが、本當の意味で佛法は聞いたことがない。それをこの歸敬文をよんではじめてきいたのだからびつくりするのは當り前だ。ぼくは歸敬文をよんで全く頭をガンとなぐられたような刺戟を感じ、同時に胸の中に大きな喜びがわいた。

その次の言葉がまたすばらしいのだ、曰く「この身今生に向つて度せずんば更に何の生に向つてか此身を度せん」と。これもぼく流に解釋すると、この現世で救われなくてはどの世で救われようというのだ。この言葉の裏には人間は努力次第でこの世でかならず救われるぞという希望と確信があるようにうけとれる。専門家の解釋からみたらどんなものだろう。これは大きな福音だ。希望と勇氣とを與えてくれる言葉である。本文はそれから「大衆もろともに至心に三寶に歸依し奉るべし」とあつて、三寶に歸依するということの説明になつてゐるのだが、ぼくはこゝまでの三つの言葉で全く胸の中がわくわくしてしまつた。何という大きな福音であろう。ぼくのようなうかつな人間は少ないと思うが、まだ歸敬文というのを知らない人があつたら、一べん讀むことをすすめる。全文三百字足らずの短いものだから、誰でもすぐ

よめる。

聖書にもずいぶん美しい言葉があるが、歸敬文は全く美しく大きく明るい言葉である。それ以來はくはときとき聲をあげてそれを唱えることにしている。

佛教の積極的一面

佛教はキリスト教にくらべて消極的だといわれる。ほくも最近まで何ということなしにそれを信じていた。

佛教が何故消極的だといわれて來たか。それは一つにはその社會的活動がにぶいことであらう。キリスト教はその點日本でも随分積極的に活動している。これに反して日本の佛教は生きている人間の宗教というよりも死んだ人間の宗教として育つて來た。坊主の仕事といえは葬式とそのあとの年忌にお經をあげることがほとんどその全部であつた。そんなところから消極的に見られたものであらう。ただほくのうちに美術の好きな人間にはこれに反ばくする材料が相當あつた。それはいわゆる宗教美術だ。手つとり早い話が博物館へでもいつて推古佛など見ればそのしづかな深い感じはどこが消極的かそれは見る者に生きた喜びを與え力を與えてくれる。それは生命の本流にさおさす最も躍動した道だ。少し大きなところでは法隆寺のみろく菩薩などそのよい例だ。もつとわかりやすいのでは高野山の赤不動など誰が見ても實に積極的なものであることがわかる。あの異様な美しさはゴッホのザイプレスにも比敵する燃え方だ。しかしほくが今言いたいのはそんな間接法ではない。美術などの力を借らず短刀直入に佛教の經典からひきたいといつて實はほくの佛教は一年生でまだ經典をほとんどよんでいないのだから大きいことは言えないが、たとえば最近讀んで感心し

た「四弘誓願文」等そのよい例である。その第二に煩惱は無盡なれば断たんことを願うという一句がある。煩惱は無盡だというのだ。ほくはそれを人間が断つて断ちきれぬものではないと解釋した。それだけきくといかにも消極的でどうしようもない感じである。然し、次にハツキリだから断たんことを願うというのである。断てないといいながらその舌のかわかぬうちに断たうという。これは大きな肯定の道だと思ふ。煩惱は断てるものだから断てというのでは断てなかつたときに困つてしまふ。しかし断てないものだと言つてもらえば、そこに大きな安心がある。それは人間の限界を示したものとも考えられる。人間の力では断ちきれない、しかし佛さんの力が加われれば断てる、そういう意味にもとれる。もつともほくは平凡な人間で、慾望にはまだまだ未練のある人間だから煩惱を一がい断たうとは思わない。むしろ煩惱はそのまゝにしておいて惱んだり苦しんだりしている中にそのまゝ救われるのでないかなどとまのいゝことを考えている。しかしそれはここで言いたいことではない。こゝでほくの言いたいのは佛教というものが、その門をちよつと叩いただけでも大へん積極的なものだといふことなのだ。

こゝまで書いて一體ほくは何のためにこんなことを書いたのか、ちよつと馬鹿らしくなつた。宗教ということとは心の動きである、それを書いたりしやべつたりすることほど馬鹿なことではない。おまけに一番大切なことをびつたり言えないのだから。(四八・九・一六)

信仰相談

擔當

中村 辨 康

信仰の形式と

精神との關係を！

(問)

念佛は唱名ばかりでなく三業に通ずるのとことでした、それでは極端に申しますと特に唱名しなくてもよいことになりはしませんでせうか。

また形式と精神とは切つても切れぬものとするならば、淨土の信者は日常生活にどう唱名を行なつたらよろしいか、そして木魚や數珠をどう考へたらよろしいか。宗教儀禮を無視したら宗教感情が失はれはしないか。

右に就て御教へ下さい。(静岡市・西草深・望月保正)

(答)

心に思ふことが動作に現はれるのは云ふまでもありません。然るに動作は同じ動作であつても、心で思ふことが異つて居る場合が相當に多いのです。お辭儀をす

るにしても、單に形式だけでする場合もあり感動した餘りに思はずもお辭儀する場合もあり、經濟上の必要からする場合もあり、叱られるのを豫防する爲にする場合もあり、古來からの習慣からする場合もあり、敬虔な氣持からする場合もあり、輕蔑する爲にする場合もある等色々ありますから、必ずしも身意の二つが相應して居るとは云へません。然しそれに言葉が加はりますと、身意の二つが相應に相應して参ります。心で思ふことと反對な言葉を使ふ場合でも、それは自分が本心をごまかして居るのだと云ふ意識を伴ひますから、罪惡とすれば二重の罪惡になるのであつて、實は本心に違逆した行爲と言葉であることを認識して居るわけであります。

これ宗教で三業相應と云ふことが尊重されるわけで、心で思つて居ればそれでよいではないかと云ふ横着な心が既に間違ひであると同様にからだで行つて居れば言葉に出さなく

てもよいではないかと云ふことも、往々にして胡麻化しである場合が多いと思ひます。

要するに御質問は理窟を云つて居るのに過ぎません。熱い時に人に對して「あついですねえ」と云つたり、自分だけでは「あついですねえ」と云はなくても、扇であふいで居ればそれでよさうなものです、ツイ思はずも口に出るところに三業相應の事實があるわけではなくなつてもよいではないかと考へるのは實情に添はない理窟にすぎません。無論黙つて扇を使つて居る場合もありますが、あついで、あふぐのとあつくもないのにあふぐのとは同じ動作でも動作の内容が異なるわけでは「外、賢善精進、内、虚假」のいけないのは分り切つたことです。動作が念佛になつて居れば唱名して居なくともよいと云ふのは一應の理窟で、心の動くままに動作があれば自然に口にも言葉が出て来るのは人間の通有です。その日常の茶飯事には三業相應を認めながら信仰上では三業の内が一つ缺けても二つ缺けてもかまはぬかと云ふのはエゲツない理窟であります。

次に淨土宗の信仰の特色は、平生の日常を尊ぶので「念佛し仕事を」ところにあるのです。それ故朝夕の勤行は特殊行で「尋常

行儀」ではありません。即ち別時行儀です。別時は法然上人も「心を以て行をすすめ行を以て心をすすめる」意味に於て「時々別時を行すべし」と云つて居られます。お買ねの「木魚」などは別時に必要です。眞宗では木魚を用ひませんが、それは別時の念佛を尊重して居ないからです。即ち別時の念佛などは自力念佛であるかのやうに考へて居るからです。また數珠はもとは印度人の頸飾りとそろ盤式に使つたものです。あれで目を練つたのですが、支那に來て道綽禪師は念佛の數取の道具にしました。そして後には佛教徒を標示する一種のマークのやうなものになつたのです。また淨土宗の二連數珠はお日課の爲のものであります。朝夕のおつとめなどは特別の時間を割いてやるものですから、實は眞宗にも別時はあるわけです。儀禮を用ゆる場合は皆な別時であつて「念佛しし仕事する」と云ふ平生の念佛ではありません。

平生の念佛はお敬ひの心（恭敬修）を失はずに朝起きて顔を洗ひお十念することから初める日常生活の念佛です。仕事の間に念佛をはさむのではなく念佛の心で仕事するのです。之は中々容易ではありません。法然上人の御歌に「佛にいつか葵草心の妻にかけぬ日ぞなき」とあるやうに、何時も如來様を念じて居るのが本當ですが、それは如來様への欣慕の心が強く烈しく湧いて來ない限り容易に出來ません。然し絶對に出來ないことはありません。人間同士の「戀」はそれを證明して居ります。然し中々出來ませんから「お日課」に依て訓練して行くのです。如來を欣慕する心こそ本當の宗教感情です。此外にどうして感情が養はれるでせうか。阿彌陀佛に染むる心の色に出でては秋の梢のたぐひならましで念佛して段々養ふより外はありませんが、それは別時念佛が一番手取り早いと思ひます。之は理窟を超えて實際を申して居るのですから理窟とは多少違ふ點もあるでせう。

忍苦と念佛と物質

(問)

私は以前にはこの世は苦の世界であつて、忍苦をし諦念して行けば、轉重輕受が出來ると或本で教へられ、忍苦と諦念との爲に念佛して來ましたので、人情には弱くなりましたが、非常に慈悲力を感じるやうになりました。然し先生のお教にはかう云ふ事が説かれて居りません。今後は特に忍とか諦念とかに心を置かずに進んでよろしいでせうか。

念佛者は清く正しく生きられるのでうれしく思つて居りますが、今の世の貧を救ふには矢張り物質を求めべく努力しなければなりません。然るに念佛ばかりして居ると小欲となり澤山金がとれません。奉仕的になり勝てず。念佛は物質的貧苦の解決にはなりませんでせうか。全然別のものでせうか。(靜岡・西草深・望月保正)

(答)

人生觀の立て方が、昔は兎もすれば消極的になり勝てた。そこに封建の餘弊があつた譯です。町人百姓は下積みになつて浮ぶ瀬もありませんでした。下手に反抗すれば切捨御免にあはねばなりません。それ故人生觀も消極的にならざるを得なかつたのでせう。隨て宗教も忍苦を奨励し「諦め」を要求しました。今でもかうした消極的人生觀を持つ人も相當にあるでせう。淨土の信仰にしても現世は何うにもならぬから、せめて來世は幸せになりたいとか、自力修行の出來ぬ無力者はせめて念佛に依て來世を助かりたいとか云つた消極的な信仰で満足したやうです。この點は確かに阿片の役目をして居たのではないでせうか。

然し眞の信仰は決してそんなものではありません。消極が積極になり、悲しみが喜びに

なり、暗らさが明るさになり、弱き者が強くなり、退嬰が進取になり、貧しさが足れるものになるものであります。

また如來様の大慈悲と云ふものは特に淨土教の信仰では大切なことです。お慈悲をば感ずることに依て初めて仰いで信ずる信仰心が湧いて来るのですから。

次に「物質的な欲望」に就てのことですが之は要するに「小欲知足」でなくては必ず破綻を生じます。「欲の爲には頭の鉢の割れるのも忘れる」などと云ひますが、全く欲には目がくらむもので「驢を得て蜀を望む」と云ふやうにその上その上と増長するものが欲です。釋尊のお弟子達は一日分の食物以上を求めませんでした。鹽は若干貯めることを許されましたが、その他のものは「六物」と云つて衣とか食器とか水灑とか云ふものだけだつたのです。無論社會制度が違ひますし、今の僧侶は出家人ではなくて在家人に均しいものですから、或る程度生活上の必要は感じます。況して一般の人は文化財としての産業に努力しなければなりませんから、或る程度の欲望は必要ですが、貧の問題は要するに社會組織國家組織に關係するものですから、念佛でこの組織の缺陷を補ふと云ふことは出来ませんが、或る程度それを匡正する力はありません。上は爲政者から下萬民に至るまで、この正しい念佛の信仰に徹するならば制度は改善され人心は匡正されて、非常に住みよい社會となり國家となりませう。それは誠に明諒に推察され得ます。それこそ此土に於ける淨化

であり極樂であります。淨佛國土成就衆生とはこのことを云ふものと存じます。

どきつい黒髪

最近、四年ぶりにソ連から復員したある友人が、こんなことを話してくれた。

長い間シベリヤ鐵道にゆられてやつとコロ島に着いた、いよいよ内地にかえられるぞ、喜びは胸一ぱいひろがり、どの顔にも明るい希望が輝いていた。波止場には迎えの汽船がついていて、甲板からは船員や看護婦がさかんに手をふつてゐる。忘れるほど長く見なかつた日本内地の人々の顔だ。彼等なつかしさに胸をしめつけられ、くいいるやうに甲板の人たちをみつめた。その時友人はおやつというおどろきにおそわれた。自分一人の感じがいかと思つてとなりの仲間を見かえつた。だが、その人の目の中にもやはり失望の色があらわれている。

「おい日本の女つて、こんなにつべりした顔だつたかな、それにあの眞黒い髪のだきつこと」友人は自分の氣持をそつちよくに訴えた。「うんおれもさきほどから自分の目を疑つていたところだ、胸の線もお尻の線もほんとに貧弱で、すこしも美しさを感じないのだ」あれほど日本美人を戀したつていたのに、これじゃ全くげん滅の悲哀だ。彼等はがつかりしたやうに話があつた。彼等はソ連の乳のもりあがつた、お尻の出つぱつた。たくましい婦人ばかりの中に長い間生活してきたので、余りにすらりとした日本婦人が貧弱

に見え、しかも赤毛で凹凸のはげしい容ぼうに見なれたせいで、ぬれ羽色の黒髪がどきつく見え、のつべりした顔が餘りに單調に感じられ、いささかかも美を感じることはできなかったのである。

「いや美つていうものが絶對的でないということをつくづく知つたよ」

友人はこう結論してしまふまでの日本人の一人よがりや暗に非なんした美。それは人間生活をうるおすものであり、藝術の根源である。しかしそのためややもすると美が生活をはなれて探求され、抽象的な絶對美論が構成される。しかし美とは生活の中から生れ、生活をとおして味わわれるものでなければならぬ。

中村辨康著

法然上人とその信仰

菊半截八十頁
定價三十圓
送料五圓

少くとも科學に抵觸するやうな信仰に永遠性はない。然も科學以上のものでなくては宗教でないことは明諒である。法然上人の宗教は人間性に目醒め、人間のドン底から立上つた信仰であるから、科學以上のものであつて然かも、極めて常識的である。この意味に於て最も現代に相應しい信仰であり、各宗各派を問はず一應この信仰を研究する必要があると思ふ。敢て之の書を一般に推奨する所以である。

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

筆 隨

兎と子供

瀧 澤 春 男

近ごろ兎をかう家が非常に多くなつた。私の近所でもたいていの家は一匹や二匹かつてゐる。どういふわけだろうと或る友人にたずねたら、即座に、賣るためさ、とひどく功利的な答辯をした。なるほど兎には草や台所の残りものをあてがつておけば、ぐんぐん大きくなる。東京は戦争以來、どこもここも焼野が原で草はとり放題にのびている。えさには困らない。もしも兎が友人のいうように四、五百圓で賣れば、資本いらすのいいもうけ仕事である。だが、私はこの友人の答辯を聞いた時、へんに反撥を感じた。なんでも人のやつてゐることを打算的に見る態度は、終戦以來の風潮であるが、こんなささやかなところにまで、それがおよんでゐることに嫌惡を感じたからである。

ところで、これに關係したことではないが、私の家でも偶然兎をかうことになつた。大體私はものぐさで動物を飼育することが不得手な上に、女房も犬は好きだが飼うだけの積極性はなく、殊に猫にいたつては大きらいときてゐるから、結婚して以來、一度も動物を飼つたことはない。ところが近所でさかんに兎をかうので、子供たちが、うちでもかいたいとせがみはじめたところに、青梅在に住んでゐる友人が或晩宿つて、では可愛いのを一匹あげようと約束したものだから、次の日曜にはさつそく子供にせきたてられて青梅までわざわざもらいに行くことになつた。

友人夫婦は一ばん大きい丈夫そうな兎をえらんでくれた。子供は大喜びでおばあさんがよこした買物籠にいれて、いそいそと家を出た。驛まで田舎道を十五分ばかり歩かねばならないが、その途中で、子供は晝間、珍らしく訪れた田舎の風景に心うばわれて、河で泳いだり、山にかけ上つたりしたものだから、すつかりくたびれて、一度も二度も買物籠をおとしたり、兎を籠から飛びださせたりして、見送りに来てくれた奥さんにとんだ迷惑をかけた。子供はその度にあわてゝ拾いあげてゐた。私はそのあどけない姿の中に、だんだん兎に對する愛情が彼の心の中につよまつていくのを見た。別れぎわに奥さんが子供に言つた。

「坊や、丈夫に育てゝ下さいね、でも箱は作つてあるのかしら」
「うん」

子供はうなずいたが、私はときりとした。箱はまだ作つてないのだ。いつでも間ぎわにならなければ手をつけない私ののんきな性質から、もらつて来てからでもおそくはないと落ちついてゐたのだが、やる人にしてみれば丈夫に育てゝもらいたいし、家のない所などへやりたくないのが當然だろう。私は奥さんだけではなく兎に對しても、なんだかすまなくなつて、へんに口をにごして奥さんと別れた。十一時ごろ家へついた。おばあさんも妻も起きて待つてゐた。途中ねむりつゞけてゐた子供は、元氣よく「兎をもらつてきたよ」うれしそうに家にかけあがつたが、二人とも兎をうけとると、なんて可愛い兎でしようと、たいへんなはしやぎ方で、さつそくざるに草をひいてねかした。子供は得意そうに友

人の奥さんから教わつた兎に關する知識をひろうした。

「石田さんの奥さんが笑つていたわよ、箱も作らずに兎をもらいにゆくなんてずいぶんのんきだつて……」

女房が皮肉な笑いを口もとにもらした。

「箱ぐらい十分もあればできるさ」

私は内心自分ののんきさをとがめていたが、負けおしみにこう言いつたが、寢床にはいると、兎小屋の材料をあれこれと考へつづけていた。

二

二、三日して上の子が沼津在の片濱學園から歸つてきた。眞黒くなつて一だんと元氣に見えた。兎がかつてあることは、もう途中で下の子供に聞いたと見えて、家にあがるとすぐ兎の所へとんでいった。

リュックもおろさないで、にこにこ笑いながらながめていたが一ばん氣にいつた時に發する野球用語「ナイス」をしきりに連發してさかんに手をふつた。よつぽと嬉しいらしい。

「どうだ、いゝ兎だろう」

私がじまんそうに言うのと、

「とても可愛い兎だね、一生けんめいにかつてあげるよ」

とまた一しきり手をふる、私はやつと片濱學園のことをきくはじめた。一週間も留守をして家がなつかしかつたうえに、兎が知らないうちに新しく家族の一員になつていたので、なにか話していゝか分らないようであつた。それで私たちがあれこれたずねると、もどかしそうに早口にしゃべつた。

「もつといたかつた」

最後にこう結んだが、子供つて過去のこととはさう興味がないうまくも明日からの生活——ことに兎との生活で心は一ぱいになつて、終りごろには私たちの質問をうるさそうにきき流していた自分のいないうちに兎がかわれたことは、よほどうれしかつたらしい。歸つた日の日記に彼はこう書いてある。

八月五日

今日はなにかから話していいかわからない。僕が歸つてみると、なんとなく家の中がかわつていゝように思われた。可愛い兎がいたりその他いろいろかわつていゝことがあつた。

子供らしく家へのなつかしさを變つていゝように思われたという言葉で表現してゐるのも面白いが、その中心が兎であることはなお面白い。これから二人の子供は互に相助け合つて兎への愛をますます深めていつた。夜になると必ず家の中へ入れる。きたなくするからよせといつても可哀そうだといつてきかない。すこし元氣がないといつてはだいて原つぱにつれてゆく。下の子は目がさめると必ず兎の前にゆく。そしてうるさいほど兎をいじりまわす。しかし愛することは美しいことだ。兎をかつてから動物に對する見方が温く變つたようだ。上の子は二、三日前友だちが蛙をいじめてゐるのをこんこんとさしてやつたと言つていたし、下の子は犬に石など投げてはいけないと小さい子供達に注意するようになった。上の子の書いてゐる日記の中から、兎のことを書いてゐる部分を摘記して、この文を終らう。

八月十一日

家にかつてゐる兎は日ましに大きくなつてくる。可愛いものだがこのごろはすつかり僕にもなれてきた。

八月十三日

兎をみてゐるうちに氣がついたことは、夜くらい所にいると目が光り、なでてやるとべちゃんこになることだ。毎日僕がなでてやるのでわざわざ僕の所へやつてくる。僕は兎が可愛くてしょうがない。

八月十六日

兎を草原につれていくとよろこんでものすごい勢いではしつたりとんだらした。

八月二十六日

今日は茶色の兎をもらつた。可愛い顔をしていて箱の中へいれるとすぐ仲よくなつたので安心した。

編集後記

○雑誌は定期的刊行物である。發行日に發行できない雑誌ほど、ナシセンスなものはない。ところが「浄土」は三月號まで順調に出しただけで、その後はずうつと休刊同様で、さきほど五・六合併號を出し、つづいてこの七・八合併號をやつと出すこととなつた。事情はどうあるうとも、編集者として誠に汗顔の至りである。

○比島から復員した直後、歴史ある「浄土」が復刊されたが、創刊當時から編集に携つた私の喜びは格別なものがあつた。しかし編集者に人を得ないのか、復刊二號を出したままで終つてしまつた。私はがっかりした。丁度その時、眞野先生から生業の合間にやつてみてくれないかと相談されたのである。責任者は眞野正順先生から中村辨康先生に變つていたが、私は喜んで快諾した。發行日が非常に

おくれているので、内容の向上よりも定期的に發行することに主力をそそいで編集した。が、多忙な新聞社の仕事のあい間に編集すること、印刷所が小さな雑誌のこととして精を出してくれないののため、思うように發行日をとれども、すことはできなかった。それでも印刷所をとりかえたためでもあるか、しだいにその月の終りには出せるようになり、紙の割當も順調に來るようになった。

○ところが編輯に人がいないので創刊以來の讀者をとりかえすことは出來ず、加えて中村先生の消極的な經營方針がたたつて、出すには出しても「浄土」はだんだんさびれるばかりである。ここで勇氣を出していい編集をすればよかつたのだが、市井の俗塵にまみれる私であつてみれば、いきおい編集意欲がにぶり、ついに今日の始末となつてしまつた。衷心讀者に詫びるより外に、私の立場はない。○しかし、こんなに苦んでも「浄

土」は死なない。この機會に「浄土」は再び眞野先生の手にかえり活がいることになつたからである。しかも教學院の俊銳がこぞつて編集に参劃し、眞野先生の指揮の下に、宗門はおるか佛教界、宗教界の一流雑誌として更生するのである。私も創刊當時のあの熱情を再びとりもどした。かげながら「浄土」發展のために全力をかためけるつもりである。編集を一新した「浄土」は次號の九月號から新装を以て讀者にまみえる。より一層の後援を願つてペンをおく次第である。(東)

「浄土」 七・八月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿三年七月二十日印刷

昭和廿三年八月一日發行

(定價七圓)

東京都港區芝公園五ノ一〇

編輯兼 眞野 正 順
發行人印刷人 春山治部左衛門
東京都千代田區神田保町三ノ十印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田保町三ノ十

配給元

東京都千代田區淺路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都港區芝公園五ノ一〇

振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

次號ヨリ

會費 金百四十四圓
一ケ年

(送料共)

定價金 七 圓 (送料)

浄土 第十四卷 第五號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十三年七月廿日印刷 昭和二十三年八月一日發行